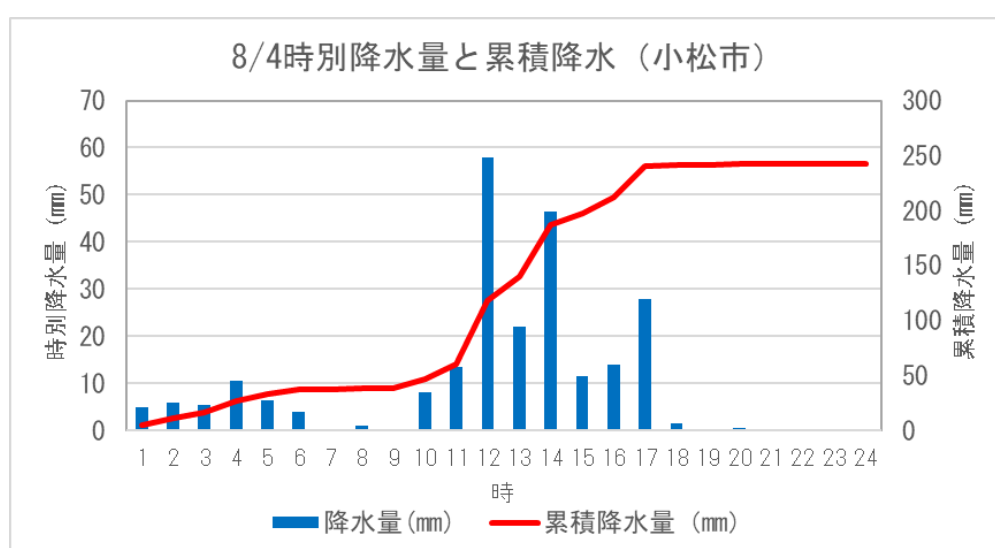


大雨の被害に対する事後対策について（第2報）

気象災害対策R 4-6
令和4年8月8日
農林総合研究センター

8月4日からの記録的な大雨・洪水により、加賀地方を中心にほ場や農業施設の冠水・浸水等被害が認められているので、事後対策を徹底して下さい。

また、七ヶ用水と宮竹用水では、導水路の損壊により、今後1週間程度、用水量が6割程度に減少することから、効率的な用水利用に努めて下さい。



1 水 稲

(1) 冠水・浸水したほ場では、稲体が軟弱化し、病害の発生が懸念されるので、退水後もほ場巡回を行い、被害の拡大防止に努める。

ア 濁水に1日以上冠水した（穂が水に浸かった）場合

早生品種：登熟後半となっており、収穫直前までの飽水管理を実施する。

中・晩生品種：傾穂～出穂期となっており、必要に応じて殺菌剤を散布して、いもち病などの病害発生拡大や雑菌の繁殖を防止する。ただし、使用する薬剤の使用可能な収穫前日数に留意する。

イ 浸水した場合

殺菌剤を含む基幹防除の実施を徹底する。

(2) 河川からほ場や用排水路に土砂が流入した場合は、土砂を除去し、通水を確保する。

(3) 畦畔の崩壊や用水路の補修などが必要で、今後の通水管理が難しいほ場では、水尻を閉じて飽水管理、節水に努める。

2 大 豆

- (1) ほ場内や排水溝に停滞水が見られる場合は、溝の土砂流入の除去や溝の手直しを行い、必要であれば新たな排水溝の設置を行う。
- (2) 冠水・浸水による水位がうねを超えた場合は、茎疫病等の病害発生が懸念されるため、排水対策を講じた上で、殺菌剤で防除を行う。
- (3) 葉が黄化している場合は、排水対策を講じた上で、窒素成分で2 kg/10a 程度の追肥を行う。

3 野 菜

(1) 共通

ア 施設などの管理

- ・停滞水、冠水によりハウスビニールが汚損した場合は、湿っているうちに洗浄する。
- ・ハウスのパイプや栽培資材の消毒を行い、次作への病害発生減を減らす。
- ・ハウスは開放してできるだけ施設内湿度を下げ、土壌水分の低下を促す。

イ 育苗用資材の消毒

- ・プラスチック類資材は、付着した泥水等を洗い流し、消毒を行う。

ウ 露地栽培におけるマルチ内土壌水分管理

- ・通路排水後、フィルムマルチをうね上部まで上げ、マルチ内の土壌水分と地温の低下を促す。

エ 被害株の対応

- ・被害により栽培継続が困難と判断した場合は、ほ場が乾いてから速やかに被害株をほ場外へ持ち出して埋設する。
- ・トラクターですき込む場合、石灰などを散布し、腐熟を早め、悪臭防止に努める。

オ 病虫害防除対策

- ・湛水、冠水により葉や根が傷んで、軟腐病、疫病や立枯病の発生が懸念されるため、予防効果の高い殺菌剤で防除を行う。

カ 肥料の流亡対策

- ・湛水、冠水した場合、土壌中の肥料の流出が懸念される。野菜類では、特に窒素・苦土・石灰の欠乏等が危惧されるため、葉面散布やかん注により生育の回復を促進する。

(2) 品目別対策

ア トマト

- ・根の活性低下によりカルシウム成分が吸収しにくくなり、尻腐れ果の発生が懸念されるため、葉面散布を5日間間隔で2～3回行う。
- ・青枯病、軟腐病や疫病に加え、樹勢が低下しているため、葉かび病・すすかび病の発生も懸念される。予防効果の高い殺菌剤で防除を行う。

イ ねぎ

- ・倒伏したねぎは早期に株を起し曲がりを防ぐ。
- ・根張り向上のため亜リン酸液肥や、根腐れ対策として酸素供給剤を施用し、草勢回復に努める。

ウ こまつな

- ・立枯病の発生を軽減するため、播種前に土壤消毒剤を全面土壤混和する。

4 花 き（切り花ハボタン）

- (1) 冠水等によりハボタンが倒れている場合は、曲がりを防ぐため、株元を固定するなど、早期にフラワーネット内に引っ掛かるように株を起す。
- (2) 立枯病や黒腐病等の発生が懸念されるので、予防防除を行う。

5 果 樹（ぶどう、なし等）

- (1) 収穫期にあるハウスぶどうや収穫期を迎えるなしでは、果実裂果の発生が懸念されるので以下の対策を徹底する。

ア ぶどう：ハウス谷間の排水とハウス内の換気を徹底する。

イ なし：排水溝を整備し、ほ場内の排水を徹底する。

なお、果実裂果が激しい場合は、裂果が終息するまで被害果の除去を控え、裂果の拡大を防ぐ。

- (2) 落葉性病害や果実腐敗性病害の発生が懸念されるので、天候回復後の防除を徹底する。

ア ぶどう：晩腐病、べと病の防除のため、ストロビルリン系剤、DMI 剤等予防効果の高い殺菌剤を散布する。

イ なし：黒星病、輪紋病の防除のため、ストロビルリン系剤等予防効果の高い殺菌剤を散布する。